

## 日本医学会分科会活動報告

日本健康学会  
理事長 渡辺知保

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

・本学会は狭義の生物医学よりも、保健学、公衆衛生学、疫学、人類生態学といった集団の健康事象を扱う領域を根幹とし、教育学、社会学など健康事象の枠を超えた領域の方法論も加えた学際的な学会としての特色を有してきた。

・年次総会は1931年以来、戦争による中断を除きほぼ毎年開催されている。過去の総会のテーマとして、「健康の多角的追求」（2018）、「ポスト人口・健康転換期の健康研究」（2019）、「いまあらためて「健康」を問う」（2020）、「COVID-19 パンデミック後の「健康」」（2021）というように、「健康」を新たな視点から捉え議論している点に本学会の特徴が端的に表れている。

・機関誌（学術誌）は、年間6冊を隔月で発行している。2009年からはJ-stageに論文を公開し1931年まで遡って論文を閲覧でき、医学史的な観点からも資料価値がある。

b. 当該領域における国際的な役割

・Society for Human Ecologyには、例年複数の会員が参加し、セッションの企画、各国関連学会の活動を伝えるセッションへの参加をしている。現会員が、過去にSHEの国際副会長を務めているなど、良好な関係を持っている。

・総会に、海外スピーカー（2017, 2018）を招待し、2011年には韓国で総会を開催している。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

・各総会においては、市民向けの公開シンポジウムを企画してきた。過去5年で取り上げてきたテーマとして、「くらしを楽しむ」、「人口政策と健康」、喫煙、気候変動と健康、COVID-19感染症流行の人類史的背景など、その時々で一般に関心の高いものを取り上げてきた。

・本学会の前身の日本民族衛生学会は、創成期である1930年代に優生運動にかかわった歴史がある。この歴史を振り返り、問題点を解析して2019年に理事会報告として、機関誌に公表した。2019・20の2大会において会員外の専門家も招聘して関連する議論を行い、機関誌に特集号を組んで掲載したが、マスメディア（毎日・共同・西日本）によって

も取材され、好意的な記事が新聞発表されている。関連して、日本医学会連合による優生保護法関連の検証委員会にも委員を送り、議論と報告書の作成に貢献した。

d. 学会運営上留意している点

- ・会員数減少など表面化してきた学会活動の種々の問題に対処するため、学会活性化を目的としたワーキンググループを立ち上げ(2014)、学会の運営や体制の見直しが行われた。会則を刷新し、運営体制の見直し(理事会の役割の明確化、学生会員制の導入など)や連携研究会の立ち上げなどを行って、法人格を持つ諸学会の体制に近づける形で整備を行い、組織運営の自由度を保ちつつ、ガバナンスにも配慮する形とした。
- ・2005年よりホームページを運営しており、現状は学会公式 twitter なども活用し、会員向けの情報伝達を主体としている。メーリングリストを整備しつつあり、理事・評議員にはこれによるコミュニケーションがとれ、オンライン・メール会議を実施している。最終的には全会員への通知をデジタル化する。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

- ・日本学術会議の関連分科会によるシンポジウムの企画・実施に参画・協力している(会員レベルの活動)。学術活動と市民との関係について議論を行ない、その結果を学術会議関連誌である「学術の動向」に報告した。
- ・一般社団法人・男女共同参画学協会連絡会で連携協力を行いながら、女性・男性研究者がともに個性と能力を発揮できる環境づくりとネットワーク作りに取り組んでいる。
- ・全国公衆衛生関連学協会連絡協議会(2008年設立、23学協会が参加)に加盟している。同協議会は日本医学会連合の分科会が多く加盟しており、同協議会の学術集会での発表や、加盟学協会と活動状況を共有するなど、同会の活動に協力している。
- ・社会部会若手トリート2019の実行委員会に参画し、他の14社会部会分科会と連携して企画・運営に携わった。
- ・学会員の男女共同参画・ダイバーシティ推進に係わる取組みを、日本産業衛生学会や日本衛生学会の当該委員・担当者と協同して進めている。